



Title	〈書評〉大谷栄一・大友昌子・永岡正己・長谷川匡俊・林淳編 『吉田久一とその時代：仏教史と社会事業史の探求』
Author(s)	趙, 梦盈
Citation	宗教と社会貢献. 2022, 12(1), p. 53-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86914
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

大谷栄一・大友昌子・永岡正己・長谷川匡俊・林淳編

『吉田久一とその時代

——仏教史と社会事業史の探求——』

法蔵館、2021年3月、A5判、532頁、5,000円（税別）

趙夢盈*

1. 初めに

本書の研究対象である吉田久一は、社会事業史と近代仏教史の先駆者であり、後の研究者に良い研究環境を作った先人であると高く評価されている。また、大変熱心な教育者であり、全国範囲で数多くの社会福祉の専門職者を育てた。本書は、5人の編集者により、関連分野計16人の研究者が、複数の角度と視座から「吉田久一とその時代」を探求した大部の論文集である。

さらに、読者の理解を豊かにするため、第5部分以外、各部分の最後に、吉田久一の関係者4人からのコラムも入っている。そのために、本書は、吉田久一とその時代における社会事業史と近代仏教史の全貌と、それら各分野を専門とする研究者の痕跡を伺える1冊であると考えられる。

2. 本書の構成と各章の概要

本書の構成は大きく5部分に分かれ、16本の論文と4本のコラム、さらに「はじめに」と「あとがき」もいれると、22本の文章からできている書物である。内容の詳しい説明の参考として、以下に本書の構成を示す。

はじめに

I 「吉田久一」とは誰か？

吉田久一の生涯と仕事

吉田久一の社会事業史研究

吉田久一の近代仏教史研究

吉田久一と沖縄

* 大阪大学大学院人間科学研究科・人間科学専攻博士後期課程

——吉田久一と沖縄留学生をめぐるミクロストリア——
コラム “思へばこの世は仮の宿”

II 吉田史学を捉え直す

戦後日本史学と吉田久一

社会福祉の歴史研究と時期区分

——吉田久一の「社会事業史研究」をめぐる——

吉田史学における近代仏教史の時期区分

コラム 満州・朝鮮キリスト教社会事業史研究の足跡

III 吉田社会福祉論を再考する

吉田久一が提起した社会福祉理論の課題

——問題と人間の「乖離」と、歴史への「歯止め」について——

一九五〇年代の吉田久一における「近代」と「国民」

——アジア情勢とナショナリズムを背景として——

吉田久一と池田敬正

コラム 福田会育児院史研究の継承を目指して

IV 福祉と宗教の交わりを探求する

吉田久一の「仏教福祉」の歴史研究について

——「否定の論理」の視点から——

遊行僧の系譜と福祉実践

——吉田久一の所論が提起した意義——

吉田久一と仏教福祉思想

——原始仏教・鎌倉仏教への関心をめぐって——

コラム 大正大学社会事業研究室と吉田史学

V 吉田史学を超えて

清沢満之と吉田久一

吉田久一史学の構造と方法

——主体と対象史の関係論をめぐる——

監獄教誨からみる吉田久一と「近代主義」

あとがき

まず第1部分『吉田久一』とは誰か?」は、4本の論文と1本のコラムにより構成されている。その内、永岡正己の「吉田久一の生涯と仕事」は、

吉田久一（1915～2005）の人物像、およびその生涯と仕事を時期区分して記述した。その上、吉田の思想展開が概観されている。

次に、大友昌子の「吉田久一の社会事業史研究」は、吉田の社会事業史の全体像と特徴をまとめ、「三部作」完成までの研究のプロセスを詳細に紹介した。とりわけ、吉田の社会事業研究とマルクス主義史学との関係性により、著作から表れる「二重構造」を特筆し、研究史上の吉田の位置付けも評価した。

3 本目、大谷栄一の「吉田久一の近代仏教史研究」は、吉田の近代仏教史研究と仏教社会史研究を長いスパン（戦前から戦後 1950 年代まで）で検討し、『日本近代仏教史研究』と『日本近代仏教社会史研究』完成までの経緯を明らかにした。その上、大谷は仏教史研究における「近代」概念、並びに近代キリスト教史との関連も議論した。

最後の論文は、宮城直子の「吉田久一と沖縄——吉田久一と沖縄留学生をめぐるミクロストリア——」である。この論文は、政府協定により 1950 年代から、社会事業大学に留学した沖縄留学生の回想を通して、吉田と沖縄留学生の関係を描き出した。ミクロストリアの手法によって、吉田の教育者である側面が鮮明に伝わってきた。

第 1 部分最後のコラム「思へばこの世は仮の宿」は、吉田の親戚である下重暁子から、吉田の母親の吉田マスについての話である。吉田マスにおける芯の強い女性的な一面と仏教者の一面が、いかに吉田の人生と研究に影響を与えたのかが伺える。

第 2 部分「吉田史学を捉え直す」には、3 本の論文と 1 本のコラムがある。まず、池田智文の論文「戦後日本史学と吉田久一」である。この論文は仏教史家・社会事業史家である吉田の史学方法論を戦前戦後の日本史学史に位置づけることを試みた。吉田は早期に羽仁五郎、大塚久雄の影響を受け、社会事業史を資本主義の形成という視点から理解した。また、吉田の著書『日本近代仏教史研究』に代表される仏教史研究は、近代仏教史と戦後日本史学の架け橋となっていると池田は評価した。その一方、吉田の晩年の研究で日本史学とのつながりが弱まったとも指摘している。

次の論文、元村智明「社会福祉の歴史研究と時期区分——吉田久一の『社会事業史研究』をめぐって——」では、戦前から戦後へ、社会福祉の歴史的 연구に広く言及し、またその中で、吉田の社会事業史研究の枠組みと時期区

分を明らかにしようとした。また、元村は高島進、池田敬正の段階論にも触れ、吉田の研究を「社会事業史を継承し、新たな社会福祉の歴史研究を方法論的に広げたものと論じた」（8頁）。

最後の論文は林淳の「吉田史学における近代仏教史の時期区分」である。この論文は吉田史学の時期区分がどのように表記され、どのように変遷したのかを検討した。個々の著作から、吉田史学の大枠は変わらなかったが、変化も現れていたことを指摘した。さらに吉田史学におけるマルクス主義とウェーバーの影響も分析した。

この部分のコラムは永岡正己の「満州・朝鮮キリスト教社会事業史研究の足跡」であり、吉田が学生時代とマハヤナ学園時代に行った3回の満州・朝鮮キリスト教社会事業調査の詳細を述べている。

第3部分「吉田社会福祉論を再考する」は、第2部分と同じく、3本の論文と1本のコラムによって構成されている。最初の論文は岩崎晋也の「吉田久一が提起した社会福祉理論の課題——問題と人間の『乖離』と、歴史への『歯止め』について——」である。岩崎は吉田の社会福祉理論史研究を踏まえ、特に吉田の著書『社会事業理論の歴史』『日本社会福祉理論史』を主な研究対象とし、戦後社会福祉理論の課題について論じた。すなわち、問題と人間の「乖離」と、歴史が反福祉的に動くときに「歯止め」となる理論は何かについてである。

次は石井洗二の「一九五〇年代の吉田久一における『近代』と『国民』——アジア情勢とナショナリズムを背景として——」である。1950年代に第二次世界大戦が終息したが、東アジアの情勢は一層複雑になりつつあった。そのために、吉田社会事業史研究にとっても1950年代の思索が非常に重要であると石井は指摘し、吉田のこの時期の言説を分析した。特に、吉田が多く使った「国民」「精神」「主体」といった語に注目し、その重要性和あり方を論じていた。

3本目は今井小の実の「吉田久一と池田敬正」である。この論文は日本社会事業史研究において、「双璧」と呼ばれている2人の研究者を比較し、その研究姿勢の相違と共通点を明らかにすることを目的としている。しかし、膨大な資料からの分析が大変困難なことであるため、池田に批判された吉田の研究姿勢というところに焦点をあてて、比較を行った。

第3部分のコラムは宇都榮子の「福田会育児院史研究の継承を目指して」

である。コラムは「福田会育児院」への歴史的研究であり、主に、「一八七九（明治九）年の仏教諸宗派合同での福田会育児院創設、財政的支援、育児院運営、他からの批判など」（340 頁）から、明治時代における福田会育児院の運営を概観した。

第 4 部分「福祉と宗教の交わりを探究する」にも 3 本の論文と 1 本のコラムがある。まず 1 本目の論文は長谷川匡俊の「吉田久一の『仏教福祉』の歴史研究について——『否定の論理』の視点から——」である。長谷川は吉田晩年の著作『社会福祉と日本の宗教思想』に強調された 1 つの考え、すなわち「仏教の『否定の論理』が象徴しているように、宗教信仰はその時代社会への妥協はない」ということについて、吉田が自分の研究の中でどのように検証し、どのように評価しているかを分析した。また、長谷川の分析は以下の 3 点に沿って行われた。すなわち、1. 『日本社会事業の歴史』の改訂過程から見る。2. 『日本社会福祉思想史』における近世の部分を「否定の論理」によって再評価する。3. 吉田の「仏教ボランティアズム」から戦後仏教社会福祉事業の停滞と今後の再生を考える。

続いて 2 本目の論文は宮城洋一郎の「遊行僧の系譜と福祉実践——吉田久一の所論が提起した意義——」である。宮城は「福祉思想と実践」の視点から、遊行僧の系譜について吉田の理解を考察し、その意義を吟味した。さらにこの吉田の遊行僧についての議論を前近代的文脈に落とし、教団組織への志向性のないところは新仏教運動との繋がりを感じていたと宮城は述べる。

3 本目の論文は清水海隆の「吉田久一と仏教福祉思想——原始仏教・鎌倉仏教への関心をめぐって——」である。この論文の中で、吉田における原始仏教思想と鎌倉仏教思想への評価を整理し検討した。また、吉田のこうした考えはその主要著作に一貫して重んじられることに理解を深めたという。その上、吉田が述べた仏教と社会福祉の関係や、仏教福祉は常に世俗権利と一定の距離を置き、緊張関係を構築すべきなどの考えを整理し、今後の研究へのヒントも明らかにした。

最後のコラムは石川到覚の「大正大学社会事業研究室と吉田史学」である。執筆者の石川は仏教寺院出身で、かつて大正大学で吉田の教えを受けた経験もあった。その縁により、石川は吉田の研究に最も深く関わっている場所である大正大学社会事業研究室に焦点を当て、「吉田史学」成り立ちを振り

返った。さらに、大正大学社会事業研究室をめぐる研究者の群像や、その研究者たちと吉田の関わりの記述によって、その時代も概観した。

第5部分の「吉田史学を超えて」はコラムなしに、3本の論文から構成されている。まずは碧海寿広の「清沢満之と吉田久一」である。碧海は吉田の評伝『清沢満之』から、吉田の清沢満之への理解と評価さらに、仏教史上の位置づけを再考した。また、西田の清沢研究と対比させ、吉田研究の近代性を確認した。さらに、現世利益を否定した清沢に対して吉田が高く評価したことから、吉田をはじめ、近代仏教研究の態度が見られると碧海は指摘した。

次は繁田真爾の「吉田久一史学の構造と方法——主体と対象史の関係論をめぐる——」である。繁田は吉田史学の方法論を中心に分析を行った。そこで、繁田はまず吉田の近代仏教史研究の方法と特徴を確認し、その上、1. 吉田の「主体」と「対象史」の関係論の在り方、2. 「主体」と「対象史」の関係論という視点から見る『日本貧困史』の意義、3. 学術細分化が進んでいる今日における、吉田の研究において、大切にされた「思想」の意義という3点から考察を深めた。

最後は江連崇の「監獄教誨からみる吉田久一と「近代主義」」である。この論文は、「吉田史学」をより立体的に見るために、福祉と宗教の交錯領域である「監獄教誨」を対象に、吉田史学の近代主義的一面を検討した。そこから、「吉田の教誨の捉え方が現在の社会福祉とどのような繋がりを持っているか」(499頁)を考え、社会福祉と後期近代の関係を考察した。

3. 終わりに

評者は学部時代に初めて日本における仏教福祉の存在を知り、非常に感心した。そのため、卒業論文の課題選定時にも、仏教福祉を意識しながら決めていた。その後卒業論文を執筆した際にも吉田の著書や、吉田の研究を対象とした論文に多く触れていた。

評者は仏教の慈悲観念と福祉の間に親和性があると考えている。特に、この世に生きている時間を、どのように過ごすべきかと考えると、やはり慈悲を持ち、助け合いながら過ごしたいと、大乘仏教に親しまれる東アジアの仏教者はそのように答えるだろう。

日本の歴史上、仏教の教えに基づいた教育、医療、文化の福祉活動が、戦

前までの長い間に公的福祉の一環、或いは公的福祉を補完するものとして民衆の生活をサポートしてきた。戦後公的事業の整備により、仏教と現代社会の関わりが衰退してきたが、2000 年以後、福祉領域で、各宗派の僧侶による社会的弱者への援助や社会問題解決への協力が市民と研究者の目を引く。評者は、日本仏教が、仏教福祉という形により、大いなる復興を成し遂げるのではないかと考えている。そのためには、もう一度先哲たちの研究を振り返って読み、考えを深めることに大きな意義がある。その意味で、本書は非常に読みごたえのある優れた研究資料であると評価したい。